

「高砂や」一謡こと始め

藤原 道夫

「高砂や・・・」という言葉は、能を観たことがない人でも知っているだろう。少し前まではお祝い事の席でよく謡われた。

今住んでいる高齢者住宅では、様々な催しが行われる。「大人の寺子屋」という会があり、その一環として「高砂を謡ってみませんか」という知らせがあった。江戸時代後期には寺子屋でも謡の授業があったとか、長屋の祝言でも謡われたのだろう。時々能を観ており、かねてから謡を習ってみたいと思っていたので、好機到来とばかりに参加した。

当日ホールに3、40人ほど集まった。講師は金春流の中堅能楽師で国立能楽堂にも出演する方。A3の紙が一枚配られた。一つの面に4本線が数段引かれ、線の一番上にひらがなが書いてあり、中央の区画にひらがな毎に黒丸が並ぶ。丸は延ばす所で白になり、また上にも移動する。音譜の代わりだ。文言は次のよう。

たかさごや このうらぶねにほをあげて このうらぶねにほをあげて
つきもるともにいでしおの なみのあわじのしまかげや とおくなるおのおきすぎて
はやすみのえにつきにけり はやすみのえにつきにけり

先ず講師が謡い、それを真似して参加者がうたう。謡い方の講釈があったが、要は息を溜めて大声ではっきり声を出せばよいのだ、と考える。音を伸ばすところはよいとして、高く上げて下げるところが難しい。同じ上げる印でも、講師は場所によって微妙に音程を変えた。そんなことはお構いなしにともかく声を出してみる。こま切れに2回うたった後に通しでやってみた。なかなかうまくうたえたようで、講師がやたらに誉めていた。参加者の中に謡の経験がある人もいたせいだろう。

一人でうたってみると様子が全く違って来る。音程が覚えられない。詞章を覚えるために空でうたう。「たかさごや」は間違えっこない。「つきともどもにこぎいでて」一いや違う・・・「なみのあわじをとおくみて」一いや違う・・・とおくの次の地名が出てこない。遠くなると覚えれば「なるお」がでてくるようになるか・・・。繰り返したい、ようやく詞章を覚えた。講習を再度受けたが、謡には程遠い。しかし能が一段と身近になったような気がする。

「大人の寺子屋」で習った謡の詞章を元著（世阿弥作）に沿って見てみる。

高砂や、この浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出で潮の、
波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり、
はや住の江に着きにけり。

ここには浦、舟、帆、潮、波、島影、沖、江と海に関連する語が多用され、うららかな海を渡る船旅の様子が連想される。しかしめでたい席に相応しい言葉は出てこない。どこがめでたいのか、能全体を見る必要がある。

能『高砂』の筋は簡単ではないが要約すると、高砂と住ノ江（住吉）と離れた神社に生える松は相生の松とよばれて夫婦にたとえられ、松の常緑にこと寄せて夫婦の和合、長寿、さらに国の安泰を寿ぐという内容になっている。習ったところは『高砂』の前半最後にワキとワキツレによって謡われるほんの一部に過ぎない。名文なので『高砂』を代表する詞章として謡われるのであろう。

講師が注目すべきことを言っていた「一演目の能を演じるには通常 1 時間 30 分ほどかかる。能楽師は今進行しているところに全力を集中して演じる。長時間緊張を強いられるので、繰り返すことは考えられない、能は一期一会の演じものなのだ」と。国立能楽堂での公演のチケットは取りにくく、すぐに完売となってしまう。ならば 2 回、3 回と演じればよいではないか、と考えるのは素人の浅はかさというものか。講師が本音をもらしたように、能を演じるのは修業したすべてを出す真剣勝負なのだ。

「大人の寺子屋」の催しに参加し、初めて謡を試みて楽しい経験をした。謡えるようになるまでには相当の訓練が必要だろう。能は謡だけではなく、「高砂や・・・」の所のように詞章の美しさを味わっていくことも肝要であろう。さらに囃子事や舞が入るとそれぞれに修練が必要となる。

「たかさごや・・・」と声を張り上げた「謡こと始め」を体験しながら、能の奥深さを垣間見る思いがした。